アメリカ留学を終えて

21014041 倉島　由衣

まず初めに、もしこのレポートを見ていて留学に迷っている後輩がいたら、絶対に行くことをおすすめする。どうせ楽しかったことしか書かないのだろうと思うかもしれないが、いったからこそ書けるデメリットもたくさんあった。その点も踏まえて言って損はないことをこのレポートを通して伝えたい。

＜概要＞

私たちは 8 月 26 日から 12 月 21 日まで、アメリカの Northwest Missouri State University に総勢 21 名の仲間と留学してきた。私たちが参加したのは ESL （ English as a second Language）というもので、英語を母国語としていない人のための英語教育プログラムだった。普段は寮で生活をし、Wells Hall という校舎で授業を受けた。食事は校内のビュッフェ形式の Union という場所を利用していた。毎日のようにイベントがあり、私たちがいた間の大きなイベントは主に Home coming、Helloween、Thanksgiving　といった所だろうか。このレポートでは準備、授業、生活、イベントに分けてアメリカ留学について書いていく。

＜準備＞

正直、私は行く直前までこの留学に乗り気ではなかった。高額な費用、日本の生活や家族、友達と離れて生活することが嫌だったのである。留学経験者を見ても、見てわかるほど流暢に喋れているわけでもなく、本当に意味があるのだろうかと考えていた。そして、こんなことを考えている時点で行く資格なんてないのでは？と思っていた。しかし、友達の後押しや叱ってまで行けと言ってくれた両親のおかげもあり留学に行くことになった。行くことが決定するとすぐに渡米するために必要な手続きが始まった。書類は英語だし、パスポートの取得は初めてだし、VISA も最初は何か分からなかったが、先生方や学務課のサポートで準備が進んだ。唯一、毎週設けられた留学対象者の授業をアメリカに行ってから使えるような日常英会話や、先輩たちの話をもっと詳しくゆっくり聞けるような時間にしてほしかった。そしていよいよ渡米当日、大きなスーツケースとリュックを背負って空港で荷物を預けたときは完全に観光気分だった。行きの飛行機の遅れはなかったものの、途中で乱気流に巻き込まれたのか飛行機がものすごく揺れて怖い思いをした。機内にはアメリカ人の CA しかおらず、それも私の初海外への期待を高めた。その後飛行機を乗り換えバスに乗って無事大学に到着した。

＜授業＞

私たちは上記の通り ESL で授業を受けていたため勿論ネイティブの人はクラスにおらず、韓国人、中国人、サウジアラビア人がクラスメイトだった。クラスは A,B に分かれて行わ

れ、クラスによって内容が違ったり先生が違ったりした。毎日 grammer、Speaking、Writing の授業があり、私がいたクラスはとても宿題が多かった。全てアメリカで配布される教科書をベースに授業は行われる。特に Grammer は教科書を埋めるような授業だった。Writing は教科書のほかに毎週新聞記事や先生が指定した記事を読み、レポートを作成するという宿題がでた。そして私が一番苦労したのが Speaking である。この授業も教科書をつかうのだが、その他に CEP でやったような方式のプレゼンのテストが 3 回あった。全てテーマは決められており、複数人でやるものもあれば一人でやるものもあった。CEP の授業がなかったら本当に一から勉強しなければいけなかったので、国情の授業に感謝した。さらにこの授業では毎回指名された人にミニスピーチの時間が設けられ、今週の参加したイベントについて話さなければいけなかった。そのため私たちは校内で行われる様々なイベントに少なくとも週に一回以上参加した。オリエンテーリングや新入生や留学生を対象にしたディナー、時には DJ イベントなどがあった。このスピーチで苦労したのが、「校内の知らない人と友達になる」というミッション付の課題がでた週である。ただでさえ英語力に自信がない上にアメリカ人に変なコンプレックスが働いて、とても苦労した覚えがある。しかし、各授業を担当してくださった Mrs.K と Mrs.Hadee はいつも優しく時には厳しく私たちを指導してくれた。この 2 人なしでは絶対に語学留学としての 4 か月は成功しなかったであろう。さらに私たちの語学の上達に欠かせなかったのが　Conversation Partner（以下 CP とする）　の存在である。CP とは、毎週 2 回担当のネイティブスピーカーの生徒と一時間話す時間であり、私は日本人の友達と 2 対 1 で Samantha という生徒に持たれた。私の留学生活を楽しくしたのは Samantha のおかげであるといっても過言ではないくらい、お世話になった人である。私のつたない英語をしっかり聞いてくれ、何か相談するといつも親身になって聞いてくれた。最初は質問に答えるのが精いっぱいだったのが、毎回話していくうちに談笑までできるようになった。Samantha ともっと話したい！という気持ちが成長させてくれたと思う。

＜生活＞

私たちの年は少し特殊で、全員 Franken　Hall という一つの寮に住むはずが、手違いで半分の人が少し月額の高く設備がよい South complex という寮に入るという事態になった。私は south complex に住んでいたので、行く前に先輩方から聞いた話が当てはまらなかったこともあり、いい思いをした分苦労もした。寮の部屋は 2 人 1 部屋で、当初はせっかくならアメリカ人がいいなと思っていた。しかし、友達がアメリカ人と相部屋になる中私のルームメイトは日本人の友達だった。最初の日は、その時点で周りに後れを取っているように思えて、ルームメイトとこれから先アメリカ人と相部屋になるように部屋を変えて貰おうとまで話していた。しかしいざ生活を始めてみると、言葉が通じる分お互いの留学生活を支えあえることに気付いた。宿題が中々終わらなかった時に互いに励ましたり、暇なときに単語を出し合ったり、分からないところを一緒に考えたりした。何より生活リズムが一緒なの

で、起床、就寝時間や部屋の使い方など一切問題なく気楽に過ごせた。今思ってみれば、ルームメイトが日本人で他の人に比べて英語を話す環境が少なくても、自分次第でどうにでもなるのだ。そう思うと、なんだか上手くいかない言い訳を増やしていたように感じる。ルームメイトとは CP も一緒で、一番いる時間が多かったのだが、自分の部屋が落ち着ける癒しの空間になったのは彼女のおかげだと感じる。彼女でなかったら絶対に楽しくなかったと自信をもって言えるくらい仲が深まったと思う。本当にお世話になった。段々アメリカの生活に慣れてくると、学校の食事に飽きてきて日本食が恋しくなった。そこで私たちは寮の一階にあるキッチンで日本食をつくった。最寄りのスーパーマーケット wall mart まで学校が運営している無料シャトルバス（時間にルーズすぎてあてにならないことが多かった)、タクシー（wifi が外で使えないため、タクシーを呼ぶのに一苦労)、歩き（結局歩くことが一番多かった）で行き、材料を調達し、夜みんなで集まって料理をした。そのまま宿題を持ち寄って一緒にやったりもした。この集まりを通して日本人同士も仲が深まり、より留学生活が有意義なものになったと思う。さらに、同じクラスの韓国人やその友達を招いて日本食を紹介したり逆に韓国の料理を紹介されたりと、異文化交流もできた。他国からのクラスメイトにはこれ以外にもたくさんお世話になった。英語に自信がなく、雑談するのが怖かった私とは正反対に他国のクラスメイトは例え流暢に話せなくても、ほかの人とコミュニケーションをとっていた。韓国人の Joon や Tina は特にそうで、授業の合間に「これは日本語でなんていうの？」などお互いがちゃんと話せるように話しかけてくれた。そのおかげもあって、最後の一か月あたりではとても仲良くなってお別れがとても辛く涙するほどだった。授業以外にも、図書館の中にあるスタバに自習をしに行くとクラスメイトも自習をしに来ていることが多く、そこで一緒に勉強したりもした。他にも校内には様々な施設があった。アメフトのスタジアムや大きな観客席がある体育館、スポーツジムまであった。実は私はジムで走っていたときにルームキーをなくしてしまい、大変な思いをした。まずなくしたことを寮の人に伝えると、新しいものを買わなくてはいけないと言われて、70 ドル払って新しい鍵を作らなければならなかった。しかし私は絶対にどこかにあると思っていたので、新しいものを作る前に自分で探していた。すると学校警察から連絡がきて、どこでなくしたのか、どんなものが一緒についていたのかなど話をきかれた。つたない英語で話しても聞き取ってもらえず、相手の早い英語にもついていけず上手くコミュニケーションができずに落ち込んだ思い出がある。散々話を聞いた挙句、私たちにはどうすることもできないから新しいものを買ってくれと言われ、結局新しいものを買った。しかしその後私の鍵はどこかから見つかって、70 ドルは結局無駄に払ったお金となってしまった。後輩にはいろいろとハプニングはあるだろうが、絶対に鍵だけはなくさないようにしてほしいと思う。日常的にこのようなハプニングは多々あった。ルームメイトとドライヤーを 2 台使っていたらコンセントが使えなくなってしまったり、部屋の鍵を部屋の中に忘れたらなぜか鍵がかかってしまい、部屋に入れなかったこともあった。一番大変だったのが寮でお湯が出なくなった日があったことだ。寮側は、お湯が出なくなるからごめんね程度のメールをよこすだけだったので、

自分たちで何とかするしかなかった。その日はもう寒い時期で、水でシャワーを浴びたら風をひいてしまうので友達の寮まで行ってシャワーを貸してもらった。毎日が事件続きで、それもいい思い出のひとつとなった。

＜イベント＞

アメリカの大学生活にイベントは必須事項である。放課後に DJ イベントがあったり、演奏会があったり、オリエンテーリングやアメフト観戦など行きたい！と思えるイベントが山のようにあった。さらに大きな行事ことの時は学校も盛り上がり、みんなでその行事を楽しむという風潮があり、私はこれが好きだった。特に Halloween は、町の小さい子供が寮までお菓子をもらいにきたり、寮を一つ使ってお化け屋敷をしたり、とても楽しかった。留学生たちは仮装をしてパーティもした。各々気合の入ったコスプレをして、ミニゲームや食事を楽しんだ。この日はとても楽しく、いい思い出になっている。もう一つ、イベントで思い出に残っているのは Thanks giving である。これは国民の祝日週間のようなもので、寮も閉まってしまうため私たちは各々ホームステイをした。私がお世話になったのは Jodee という女性の家だった。彼女は一人暮らしで、夜遅くまでハリーポッターを見たり一緒にご飯を作ったり、買い物に連れて行ってくれたりした。実家に連れて行ってくれて、温かい家族の皆さんとご飯を食べたりゲームをしたりしてとても楽しかった。2 日間、Jodee さんの祖母のおうちに泊まらせてもらって周辺の町に連れて行ってくれたりと、とにかく至れり尽くせりで本当にお世話になった。最後には写真立てと写真をプレゼントしてもらい、人の温かみを存分に感じた。

＜総括＞

この留学で私が一番に感じたのは人の温かさだったかもしれない。最初は外国というだけで浮足だち、アメリカにいるだけで自分が少しかっこよくなったと勘違いしたが、アメリカも日本と変わらない一つの国であり、どれだけ鼻が高くて目が青くてもアメリカ人も話す言語が違うだけの人間なのである。こんなこと当たり前なのだが、どうしても国や言語の壁は大きく、別の「モノ」として見てしまいがちだったのだなと感じた。そんな中で何も分からず右往左往する私たちを支えてくれたり助けてくれたりする人はたくさんいて、そのことが分かったことだけでもこの留学には意義があると考える。たとえ部屋の鍵をなくそうと、クレジットカードの使い方が分からなくとも、英語という手段を使って乗り越えなければいけない状況下で英語が上達しなかったということはないし、授業を通しても英語力は上がったと確信している。英語を別言語ではなく、コミュニケーションの手段として考えられたことは自分の中でとても大きい。そして、日本という国がもっとすきになれた。他国の人は自分の国に誇りをもって自分の国のことをよく知っているのに、私たちは自分の国のことを全然知らなかったし、何かにつけてだから日本はアメリカに比べてダメなんだと思っていた。しかしそれはとても浅はかな考え方で、もっと自分の国のことを知って日本はこんな魅力があるんだと伝えられるほうが 100 倍素敵で今必要なことなのではないかと考え

る。このように考えられたのも実際現地に行ったからであり、この留学をサポートしてくれた家族や友達、先生方にはとても感謝している。一緒にアメリカに行った仲間たちはずっと大切にしたい友達になったし、支えあった 4 か月は生涯忘れられない貴重な経験となった。今後もこの経験を活かし、英語の勉強に励むとともにもっとたくさんの海外経験をしたいと考える。